教育をどう改めるか

大谷 南海男*

1. はじめに

「こんなことがあっていいのか」先日「少年たちの本音」というTBS放送を聴いていて思った。少年たちの発言一。少年A「人の命がどうして尊いんだよ。ムカついて殺しちゃなぜ悪いんだ」少女B「エッチしてどうして悪いの。あたしおカネが欲しいんだもん」その他いろいろあったが止めよう。子どもらしい夢がない。聴いていて気が重くなった。

戦後、天啓のように与えられた民主・平等。人びとは夢じゃないかと飛び付いた。不慣れに誤解も重なって、五常はもう古いと人倫の教えも捨て去る始末。それでも「きつといい国に生まれ変わる」と思った。気が付くと、社会は退廃の色を深め、人としての生き方が問われている。

科学・技術の分野でも事情は似ている。「原子の構造を知りたい」これは科学者の夢であった。この玉手箱を開くと、原爆という鬼子が生まれた。合成の誤謬とでもいうのだろうか。いまの日本はこの誤謬のクモの巣に掛かって身動きが取れない。

同じ敗戦国ドイツはどうだろう。論理的で秩序を大切にすドイツ人は曖昧な妥協をしない。敗れても連合国に対して卑屈ではなかった。教育改革の勧告を拒否したのも、その一例である。教育に大した混乱が起きないのは、このしたたかな自主の精神によるところが大きい。

ドイツ人の厳しさは他人に対してばかりではなくて、自分にも向けられる。ワイツゼッカー大統領は降伏四十周年(1985年5月8日)の連邦議会で歴史的な演説を行った⁽¹⁾。

「罪のありなしを問わず、我われ全員が過去に対する責任を負っています。後になって過去を変えることはできません」

こういって当時の風潮を厳しく戒めた。いまでもナチス戦犯に対する時効は認めていない。

一億総ざんげで戦争責任の問題は一切お開き。そんな我われには窺い知れない厳しさである。荒廃する教育現場、夢を失った生徒たち。その前で立ち尽くす我われの前途に光明を与えてくれるのは、ドイツ人のような自分に厳しい自主の精神ではあるまいか。

2. いまの教育

(1) 子供は大人社会を映す鏡

「何か面白いことしようや」友だちと徒党を組んで、河川敷のホームレスの老人を襲う。ケラチャ狩りというそうだ。捕まるとお巡りさんに答える。「多数決で決めたから…」幼稚園から抜け出したような若者が増えた。

家庭、学校、社会がそれぞれの教育機能を果たしておれば、子どもはすくすくと育つ。いまの社会を見る限り、大人たちがこの当然のことを考えている様子はない。

戦後50年。誰もが経済大国と胸を張るが、一皮剥けば私欲丸出しの明け暮れ。政治家はもちろん官僚、財界など指導層の倫理観の乏しさ。日本の不幸は政治家のなかに一人のワイツゼッカーもいないことである⁽²⁾。

不道徳もカネ儲けの大事な蔓。あらゆる背徳にも自由を楯に歯止めが掛からない。かつての大和撫子も男女同権の大合唱に支えられて、颯爽と家を空ける。失樂園が不倫と離婚を煽る。やがて家庭は崩壊。子どものことなど構ってはおれない。「…だって自由・平等でしょ」世を挙げて横行する自己中心と無責任。誰も権利には厳しいが義務には甘い。規制緩和も大切だが、これほど人の心が緩んでは社会のタガは大丈夫だろうか。

学校には勉強の不得手な子どもも多い。そんな子どもが居場所を求めて街に出れば、私欲の渦巻く世界が待っている。こんな世相で子どもに「美しく生きよう」と説いても空しい。「子どもに道理を説くな。行為で教えよ」このエミールの中でのルソーの名言は時代を越えて生きている。

(2) 学歴と大学入試

中日新聞(1995年3月)の報道によれば、1994年国際統計では、日本やアジアの小学4年生の学業到達度は世界のトップレベルだという。欧米はすべて下位。イギリスは平均点以下である。だが「やっぱり日本の教育はすばらしい」と喜ぶのは少し早い。

東大の評価は世界ランキング41位。「評価の基準は？」と疑いたくなるが、欧米の有名大学はちゃんと上位に収まっている⁽³⁾。

* 元九州大学教授

Can We Improve the School Education in Japan?; Namio Ohtani

Keywords: academic background, entrance examination, school education, manual, independence, dialogue, rationality

1998年5月13日受理

改めて考え直してみる。英語の Education の語源は人の才能を引き出すことだという。入試だけ厳しくて詰め込みの日本。入試はないが入学後の選別が厳しい欧米。どちらが才能を育てやすいかは明らかである。我われは学校教育を学歴、つまり「いい大学—いい企業」という視点でしか評価しない。その根底には異常なほどの競争心がある。この習性とこれを支える社会のあり方が、日本の教育を駄目にするアキレス腱である。

入試は明治以来の知育偏重。若者は1点を争う一発勝負に人生を賭ける。大学進学率は45%を越えたが、多くの学生の欲しいのは大卒のレッテルだけ。入学すれば学生たちは気ままに優雅な4年間を送る。

高校・中学でも受験勉強の重圧で、生徒の豊かな心が育ちにくい。高校進学率は93%に急増したが、学力不足の生徒も増えた。中退者は毎年11万人を越え、校内暴力や非行は跡を絶たない。

「追い付け。追い越せ」の時代には、画一的なマスプロ教育も必要であった。官民挙げて教育規模の拡大に対する要望は強かった。追い付けばもう頼る見本はない。誰かが俄かに「個性だ。創造力だ」と旗を振る。だが、学校も長年手慣れた画一教育から脱却することは容易でない。

憂慮する中教審の度重なる答申。偏差値の廃止、入試方法の変更など文部省の改善策。どれを取っても必要な試みであるが、先ず人としての生き方を多様化すべきである。同時に受験競争そのものに抜本的改革を加えない限り、すべては焼け石に水。ものには限度がある。我われは度を越えた教育の拡大政策について、効果と逆効果のバランスを考える必要があった。

一本道をマラソン競走するような社会では息が詰まる。道草を食いながら、思い思いに土手を歩いた子どものころが懐かしい。

(3) 形だけの平等

平等の権利。黄門サマの印籠並みだから、使い方によっては教育を駄目にする。

その例を一つ二つ。東京のさる小学校。運動会では1等、2等の付く競技は一切ご法度らしい。ママさんがいう。「ビリッ子の惨めな気持ちを察してあげなくっちゃ」この調子だと、学芸会ではきつと主役のいない白雪姫が出しものになる。

国内ばかりではない。ニューヨークの日本人学校では1組、2組の組分けができない。2組の子どものママさんから、すぐ抗議の電話がかかる。「なぜうちの子は1組に入れないでしょうか」平等意識もここまでくれば只ごとではない。

こんな意識が強いのは格別ママさんだけではない。ある大学で学生の数学、語学の学力不足が問題になった。早速に教務委員会が開かれて、学力に応じた組分けが提案された。A先生はこの現実的な提案に一も二もなく賛成した—イギリスの高校ではストリーム制の組分けが行われている。ところが強硬な反対論が相次いだ。

A「予備校では実力に応じて組分けしているようですが…。その方が合理的じゃないでしょうか」

B「いや。大学は予備校じゃない。大学は基本的人権、つまり平等の権利を守るべきです」

肝心の講義は分からなくてもいいらしい。学生の学力を向上させる現実問題が、形式だけの平等論に擦り替えられる。これが日本の平等、つまり横並び志向の正体である。子どもたちは毎日漫画を愛読しながら、ママさんと口を揃えて主張する。「ボクたち、大学へ入る平等の権利がある」

(4) マニュアル化

受験に鎬を削った割には、学生たちへの評価はあまりかんばしくない。「日本の大学生お地藏さんみたいね。瞑想ばかりで質問しない」ある外国人がこういって肩をすぼめた。学生はマニュアルがないから何を質問していいのか分からない。

入試で威力を発揮するのは虎の巻、つまりマニュアル。ベルが鳴る。問題を一読すれば虎の巻のあの1ページが閃く。「しめた！」合否はこの一瞬で決まる。これに応えるのが歳末恒例の風物詩—予備校ご自慢のホテルでの特訓である。

幸い入試の関門を突破した学生たちは、知識を詰め込んだマニュアルを頼りに卒業を目指す。この関門でエネルギーを使い果たした学生には、レジャークラスが用意される。ここには無邪気な若者が群がって、自分のこと以外にはどこ吹く風。優雅(?)な無関心が横行する。

卒業する彼らを待ち受けるのは会社特製のマニュアル。商品売り込みの「挨拶の仕方」から「ベットの褒め方」まで、至れり尽くせりである。これを締め括る訓示は「新人諸君の創意と工夫に期待する」これでは少し発想が無理ではあるまいか。

もちろんマニュアル化は学校や会社だけの責任ではない。最近の生活環境の変化は人間をボタンを押すだけの道具に変えつつある。学生が年々幼稚になるのも無理はない。だが「いざ鎌倉！」に「マニュアルを持て！」では間に合わない。

(5) 書物の偏重

大学の学生ホール—朝から大勢の学生が群がって、学問や雑談の花が咲く。だが、その周りの汚いこと。タバコ、空き缶のポイ捨て、出しっ放し。学生たちの談笑の席を縫って、二人のおばさんが重い掃除機を引きずりながら黙々と働いている。ロボット工学を語り合う学生たちがこれを見ても「あッ、無駄な仕事だ。ボクたち汚すのをやめよう」とは思わない。まさか、汚すのもおばさんを失業させないため、とまでは思っていないだろうが…。

学生諸君はロボット工学を本のなかや工場での話だと勘違いしている。ロボットが仕事の無駄を省く工夫で、場所を問わないものとは思わない。無駄の原因—ポイ捨てさえ止めれば掃除機やロボットも要らなくなる。文化やロボット工学を語り合う学生諸君に、「文化とは衣食住を改善することですよ」と訴えたい。

水が水素と酸素からできていることは、本を読めばすぐ分かる。だが「水の正体は？」水の流れを見て、この疑問を持ち、それを解こうとする執念を持たない限り、 H_2O という水分子の組成を突き止めることはできない。「知ること」と「見付けること」には、天と地ほどの開きがある。ロボット

3. 教育をどう改めるか

(1) 自主性を育てよう

誰にとっても「私」ほど大切なものはない。ところが、私の付く言葉のイメージは暗い—私利、私欲、私物化、私生児など。そういえば、「私」は大切だと教えられた覚えがない。これはどうしたことだろう。「いや、建て前だ」「謙譲の美德だ」という反論があるかも知れない。これほど大切なことを本音だ、建て前だと曖昧にすること自体が不自然ではあるまいか。

それに比べると、私をIと大文字で書き、相手をyouと小文字で書く英語国民はむしろ素直である。これは私の尊さを幼児を含めてすべての人びとに、認めているからに他ならない。大文字のIが個人の自立と社会の民主化を保証している。いつの時代からIを大文字で書く形式が始まったのだろうか。この点、私は西洋社会の人間に対する省察の深さを感じざるを得ない。

日本古来の美德は滅私奉公であった。もちろん犠牲の精神は素晴らしいが、我われが「人はどうあるべきか」よりも、「人をどう支配するか」の優先する社会に生きてきたことは否めない。

「私は大きいよ」「いや、小さいよ」と教える社会。どちらで子どもが自主的に育つかは明らかである。この意識の違いをよく考えてみる必要がある。日本に民主的ルールが根を下ろしていくのも、この違いに由来するのではあるまいか。

本能的に卑下できない大切な私。その私をいつも卑下しなければならぬ社会では、私はどうなるか。警戒心ばかり発達した卑屈な人間と、それを冷笑する横柄な人間の群れを生むだけである。

自分を小生と謙遜するのが日本の常識である。その常識には反するが、敢えて日本の子どもたちにも「君たちは小生ではなくて、〈大生〉だよ」「私」を大切に大きくならうね」と教えたい。もちろん、これは子どもを我がままに育てることではない。子どもは私の尊さ—したがって他人の私の尊さ—を理解しながら育つことが大切である。

親は先ず自他を区別して、子どもと一歩距離を置く。子どもの生活に深入りせずに、その独立を助ける。血縁のない隣の子をわが子と同列に置く。これが民主社会を築く第一歩である。子どもと一心同体を親心と思い勝ちな我われの注意すべき点であろう。

子どもに自主性が育てば、「他人は他人、自分は自分」の個人主義も生まれる。そのとき初めて国民は横並び志向から解放されて、日本の教育は正常な軌道に乗るはずである。

(2) 現実をよく見よう—対話の勧め—

「こうでありたい」という期待。「こうであるはず」の思い込み。どちらも現実を見る目を曇らせる。子どもがものを正しく見るために、主観を避けて実証に徹する癖を付けたい。

現実を重視するイギリス。高校社会科では生徒の支持政党を聞き、各政党の政策について討論させるという。日本では

ご法度だが、イギリス人の寛容さと見識とはさすがである⁽⁴⁾。

日本の高校歴史・社会科では、講義より討論を奨励すべきである。歴史では先ず身近な近・現代から重点的に教えてはどうか。生徒は遠い古代・中世の出来ごとに熟知する必要はない。

教師は宿題と資料を与えて、生徒の勉強—分析と総合—を援助する。レポートを批判、討議して添削を行う。すべての授業単元を半減する。

理科—自然法則の発見には科学者のドラマが秘められている。理科を暗記させないために、教師は法則を「既知の事実」として語ることを止めよう。発見に辿り着くまでの「不思議と感動」について語ろう。

対話はものごとを理解するための優れた手段である。我われは対話が不得手で、すぐ感情的に対立する。相手と対話し妥協するには、感情を抑えて冷静に話し合う寛容さが必要である。平素から訓練を重ねて、妥協のコツを身に付けることが大切であろう⁽⁵⁾。

「イギリスでは多数派は対話を通じて少数派の意見を尊重してきた。イギリスの今日があるのは、この伝統のおかげである」確か物理学者インフェルト博士がこんなことを言っていた記憶がある。

イギリスは立憲政治の老家筋。さすがだとは思いますが、いつも理想どおりにはいきまい。仮りに話半分としても、日本の社会にもこんな日が来ればいいのだが…。

(3) 合理性を重視しよう

遠くは肉弾三勇士。近くは神風特攻隊。その鬼神も泣く壮烈さは大和魂の権化と称えられた。この皇軍伝統の大和魂の前では、合理主義は影を潜めた。

無謀を承知で奮戦する将兵。その勇姿は鉄砲の火煙の前に戦国の花と散った武田騎馬軍団の面影と重なる。天下の秀才を集めた陸海の将星も、伝統の持つ呪術からは遁れることができなかった。

精神を論じ、情感の世界を愛するのは日本人の親譲りの素質である。遠く戦乱に明け暮れた鎌倉・室町のころ。厭生観が人心を捉えて、人びとは哀愁の美に耽溺した。以来一貫して祖先は自然を情緒と切り離して眺めることはなかった。ヨーロッパの人びとの心底を流れる冷徹な合理主義は、日本人の肌には合わない。

こんな心情の我われ。カラオケのマイクを握れば、忽ち気分は任侠を愛した明治に戻る不思議さ。いまでも人間関係を測る物指しは義理尺である。もちろん義理・人情は日本人の優れた個性であり、美点でもある。ただ理性と感性のバランスを欠いた物指しでは、ものが正しく測れない。社会に歪みを生じやすいのも欠点である⁽⁶⁾。

世間を賑わす根回し、ダンゴや派閥など。さまざまな不公正が跡を絶たないのも義理・人情ゆえである。どんな制度やルールでも、肌に合うのは自前のもの。最近の世相はまるで、ルール違反お構いなしの野球やサッカーを見ているような錯覚に襲われる。

感性の持つ美点を生かして、理性とのバランスを取ることには至難のようである。フランスの高校では必修の哲学コース

を設けて、生徒に論理的なものの考え方を教える。我われも参考にすべきであろう。

(4) 「ノー」という勇気

いうべきときに「ノー」ということ。これが人生の平和と幸福への要諦であることは誰にも分かる。だが「和をもって尊し」とする日本社会。「ノー」というにはよほどの勇気が要る。

杉原千畝リトアニア総領事はこの勇気を持った珍しい外交官である。彼は先の大戦中に外務省の訓令に「ノー」といって、五千人のユダヤ人の命を救った。この人道的な行為に対しても外務省の処遇は冷たかった。

軍部にも信念を貫いて明けの明星のような光芒を放つ人物がいた。軍人作家水野広徳海軍大佐もその一人である。早くから近代戦の本質を国家総力戦と捉え、一貫して空軍の充実を主張した卓見。その眼光の鋭さには感嘆する他はない。

大佐が日本必敗を予言して日米非戦論を唱えたのは、先の大戦20年前である。天才は世に容れられない。狂気の蛮勇には深慮も卑怯と映る。軍は大佐の執筆を禁止した。この誤りに気付いたときには、国家は奈落の底に蠢^{ウズ}めいていた。大佐の孤高の生涯には、荒野に凜然と咲く赤いバラの花を見る思いがする。

アメリカをサリドマイドの悲劇から救ったのは、女性医務官ケルシー博士の勇気であった。スウェーデンがスモン病の発症を食い止めたのも、担当官の勇気ある措置だったという。外国でできることが日本でできないはずはない。これは人の心の問題である。

仲良しクラブの日本社会では、底い合うのが人情。公私混同にも和の原理が働き、自浄作用を鈍らせる。和の功罪は諸刃の剣である。杉原総領事や水野大佐の孤立も集団の和とは相容れない個性のゆえである。我われは個性的人物の乏しさを憂うよりは、個性を育てる寛容さに欠けることを自省すべきである。

(5) 学校教育をどう改めるか

「号外。号外！」鈴の音がする一見れば新内閣成立。新首相に中坊公平氏就任。「教育ビッグバン始まる」とある。新しい中教審委員には松…、堀…、など著名な名前が並び、外国の知識人数人も加わっている。口々に司馬氏を惜しむ声が強いとある。発表された内容を要約する一。

文教政策第1号—文部省の権限を縮小、各都道府県教委の権限を強化。教科書、授業方法の多様化を測る。必要に応じて各教委に外国人若干を配置。教育方針—特に生徒のものの考え方。生き方などの刷新を行う。この経費には一院制、衆議院200名に削減した歳費、政党助成金を当てる。

同第2号—(1) 大学入試の筆記試験を全廃。内申書、論文と面接によって定員の2倍を選抜。その半数を抽選合格させる。

(2) 大学3年。うち1年はボランティア活動。

(3) 大学の編入学定員を拡大。毎年学生1/3を更新する。

(4) 大学卒業証書は発行しない。必要の場合には国家試験による一学歴主義の打破。

(5) 大学教員を任期制(5~10年)として、再任を認めない。

(6) 高校・中学—(イ)高校2年選択制。中学3年。授業は午前中だけ。単元半減。(ロ)討論を重視し、暗記から考える教育へ転換。(ハ)午後は1時間、特別テーマの討論。その他はクラブ活動に当てる。

(7) 予備校、学習塾などの教育産業を廃止。

「なるほど。修業年限が随分短いね」

「学校で何も彼も教える必要はないと思う」

「外国人に頼るのはどうかなあ」

「我われの生き方を考え直すんだよ。少しは新しい教師がいてもいいじゃないかな」

おや?—あれこれ考えているうちに、私はすっかり眠って夢を見ていたらしい。「正夢であればいいのに…」と思ったら目が覚めた。

4. おわりに—当たり前に帰ろう

今昔物語に百獣の王になろうとした狐の話がある。犬や虎を従え象に乗って得意満面である。最後には百獣の王、獅子の背中に跨って意気揚揚と広野を渡る。そのとき獅子が一声大きく吠えた。狐は真逆さまに墜落して死んだ。人も分に過ぎた欲は持たないことだと語り伝えたという(巻5・第20)。

古代文明が華と開いたギリシャ・ローマの栄華も永くは続かなかった。その原因は内なる敵、豊かさのもたらした欲望と腐敗にあったという。我われの姿を見る思いがする。

いままで追い求めてきた豊かさとは、いったい何だったろう。人間らしく生きるため? いや。そうとは思えない。だが私は失望しない。青年諸君がいる限り、これまでの価値観を変えてくれるものと期待している。本当に人間らしく生きるために…。

広大な宇宙の一角、ケン粒ほどの地球に生を受けた我われである。徒らに科学・技術の力を過信せず、敬虔さをもって自然の恵みに感謝しよう。

当たり前が軽視されて異常が横行する時代であるが、青年諸君に訴えたい一。生命への畏敬と愛惜の思いを深くして、蝶やトンボとともに平凡に生きよう。政治・経済の仕組みを、この方向へ軌道修正しよう。そして掛け替えのない地球を守ろう。

文 献

- (1) 熊田 亨：欧州の中のドイツ，中日新聞，1995年7月27日。
- (2) ワイツゼッカー訪日記念シンポジウム，比叡山トーク：テーマ「日本人のモラル崩壊」，1997年8月10日。
- (3) 寺島実郎：J. ゴーマンレポート，SAPIO，(1998)，3/25，14。
- (4) イギリスの教育については，例えば森嶋通夫：イギリスと日本，岩波新書，(1977)；清水正昭：イギリスの学校生活，サイマル出版会，(1986)。
- (5) 笠 信太郎：ものの見方について，角川文庫，(1957)，194。
- (6) 日本の社会については，例えば中根千枝：タテ社会の人間関係，講談社現代新書，(1967)；南 博：日本人の心理，岩波新書，(1953)。